様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 20 日現在

機関番号：32686
研究種目：基盤研究(c)
研究期間：2009～2012
課題番号：21601009
研究課題名（和文）美術を通してアフリカはどう語られているか―ビエンナーレと美術館の力学の研究
研究課題名（英文）How has Africa been represented through art?: A study on the power structure between biennales and art museums.
研究代表者
川口　幸也（KAWAGUCHI YUKIYA）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：30370141

研究成果の概要（和文）：アフリカの同時代美術はアフリカ内外のビエンナーレや美術館で着実に存在感を高めてきたが、ここしばらくは一服の感がある。一方で、ヨーロッパでは、美術館よりも民族博物館の方がアフリカの同時代美術の収集に前向きである。こうした事態を踏まえて、アフリカの同時代美術を、ビエンナーレや美術館での展覧会など、既存の場や機会を捉えてアートとして積極的に提示していくと同時に、アフリカの同時代美術のかたり方を根本から見直して、アートとは異なる新たなかたりのしかけを築き、それによって語っていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：Contemporary African art has recently marked clearer presence in biennales and art museums both inside and outside Africa, but it seems to lose momentum at this very moment. On the other hand, particularly in Europe, some museums of ethnology are more active to collect to display contemporary African art than art museums. Based on the current environment, we should make more efforts to represent contemporary African art as art in the global artworld through existing places or opportunities such as biennales or exhibitions held in art galleries, while we basically need to reexamine the way to represent contemporary African art to construct a new mechanism and channel of representation, through which we can represent contemporary African art in quite different contexts from the so-called art, including mythology, legends and other local values.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：時限
科研費の分科・細目：博物館学
キーワード：アフリカ美術、表象、権力関係、美術館、ビエンナーレ、展示

１．研究開始当初の背景

同時代のアフリカ美術は、1989 年にパリで行われた「マジシャン・ドゥ・ラ・テール」展でその一部が知られて以来、近

年急速に世界的な注目を浴び、各国で展覧会や関連の出版、シンポジウムなどが相次いで行われてきた。一方、この間、ビエンナーレ（隔年開催の国際美術展）や美術館といったアートをめぐるインフラ整備も世界的な広がりを見せており、アフリカ諸国も例外ではない。たとえばアフリカ美術に特化したビエンナーレとして知られるセネガルのダカール・ビエンナーレは、1990 年代半ばから隔年で開催され、着実に歴史を積み上げてきているし、ナイジェリアなどでも同時代美術を専門とする展示空間が現れている。けれども、残念なことに現状では、欧米など先進国とアフリカでは、情報の発信力に格段の差があり、美術の世界ではアフリカは依然として欧米によって一方的に語られ、周縁化され続けている。

２．研究の目的

上記１の状況をアフリカとヨーロッパを主たるフィールドとしてつぶさに調査し、その背後にある構造的な原因を把握、検討し、そうした状況をどのように改善し、克服していくのか、現実的に可能性のある手立てを考察するというのが、本研究の一義的な目標である。

具体的には、(1) アフリカの同時代美術がアフリカの内側と外側でどのように生み出され、そしてビエンナーレや美術館というアートワールド内部のかたりのしかけを通して、誰によってどのように語られていくかを具体的に比較し、そこに働いている構造的な力関係を明らかにする。次に、(2) こうした先進国とアフリカとの間に横たわる文化表象をめぐる権力関係を克服するための具体的な道筋を探る。つまり、いいかえるとアートをめぐるアフリカと先進国との間で、一方的な語りではない、双方向的な語りあいの場、相互交流の回路はありうるかどうかを検討し、あるとすればどのような形がありうるかを提案し、できれば展覧会などといった目に見える形で提示する。以上が本研究の目的である。

３．研究の方法

ダカール・ビエンナーレ（セネガル）とヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア）、およびその周辺に位置する国際美術展、そしてヨーロッパ、アフリカにおける美術館、ギャラリーなどの展示施設を中心的にとりあげて、アフリカの同時代美術がアフリカの内側と外側でどのように生み出され、展示されているかを具体的に比較する。

セネガルとイタリア以外で対象となるのは、アフリカではナイジェリア、ガーナなどであり、ヨーロッパではフランス、イギリス、ドイツなど、かつて植民地支配などを通してアフリカと深い関係を持っていた国々である。

とくにヨーロッパでは、民族学博物館や歴史博物館など、必ずしも美術に関わりのない、いわばアートワールドの外側に位置する組織にも目配りをして、アフリカの文化や歴史、そして同時代美術がどう展示されているかを比較調査する。

他方、セネガルやナイジェリアなど造形活動が盛んなアフリカの国々では、現にそこで活動しているアーティストたちや、ヨーロッパに拠点を移して活躍しているアーティストたちにインタビューなどによって直接話を聞くことも行

う。

4．研究成果

1990 年代以降、とくにこの十数年間で、たしかに世界の主だった美術館に収蔵展示されるアフリカの同時代美術は着実に増えてきた。現に現代美術の祭典として最も古い歴史と高い格式を誇るヴェネツィア・ビエンナーレでは、アフリカの同時代美術はすでに常連になって久しい。ニューヨークの近代美術館やパリのポンピドゥ・センターなど、世界を代表する近現代美術館のコレクション展示で、アフリカのアーティストの作品を目にすることは日常化している。

またアフリカの中でも、ダカール・ビエンナーレは今日のアフリカ美術に関する情報のプラットフォームとしての国際的な地位をますます確かなものとしている。

けれども、4 年間の調査の結果判明したのは、残念ながらアフリカの同時代美術の存在感には一時期ほどの勢いがなく、全体としては伸び悩んでおり、アフリカへの視点、視覚はかつてとさほど違っていない、という現実である。

というのは、たとえばヴェネツィア・ビエンナーレに招かれるアフリカのアーティストは、この十年ほどは 3 人内外で推移しており、今では固定枠になった感さえある。以前のようにアフリカのアーティストに的を絞った企画展もみられない。また国別展示に出展しようという国も増えていない。

そして見逃せないのが、あまり表だって話題になることはないが、実は今もなおヨーロッパでは、数からいえば半分以上のアフリカの同時代美術が美術館ではなく民族博物館に展示されているという事実だ。

とりわけドイツのミュンヘンやベルリンでは、民族博物館の中にアフリカの同時時代美術がまとまって展示されているのである。また大英博物館のアフリカン・ギャラリーでも同じような光景を目にすることができる。

こうした現状を踏まえて、では美術を通してアフリカをかたっていくうえで、どのような方向を目指すべきなのか。まず、とりあえずはアートとしてのさらなる認知を求めて、今後いっそう、(1) ビエンナーレや近現代美術で行われる企画展示など、国際的なアートワールド内の既存の機会を捉えて現代美術として提示していく必要がある。

ただ、これだけでは、結局、欧米を中心とするアートワールドの片隅に場所を与えられるだけという従来の構図から抜け出せないだろう。

そこで、よりラディカルな視点から、同時に次のようなことが求められるのではないだろうか。それは、(2) アートとは違う別のかたりのしかけを創出し、そのための場、とりわけローカルな文化や歴史といった文脈の中でかたっていくための場を、積極的に立ちあげていくべきだということである。

たとえば、伝統的な地域の祭り、そこでかたられる神話や伝説、そして営まれる伝統的な造形などは、そのための具体的な出発点のひとつになるだろう。

本研究の成果発表の一環として、2010 年から 2011 年にかけて、国立民族学博物館をはじめ、神奈川県立近代美術館 葉山など計全国 4 館で「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展を開催した。この展覧会では、酒瓶のキャップやアルミシールなどの廃品を縫い合わせた布状の大作や、木彫のレ

リーフなど、エル・アナツイの半生の作品群を、これまでのように単にアートとして展示するだけではなく、その背後にある西アフリカの歴史や文化も併せて紹介し、その文脈でもかたろうとした。ローカルな歴史や文化によって、アートというかたりを相対化していく試みのひとつであり、今後の道筋を示唆する具体的な提案であったと考えている。

アフリカの同時代美術をかたって行くに際して、いま求められているのは、アートというグローバルなかたり、グローバリズムに手をこまぬいて呑み込まれていくのではなく、異なる価値にもとづくかたりのしかけ、いわば自分たちの文化と歴史を守っていくための自前の陣地、を構築していく地道な努力ではないだろうか。

なお、欧米の美術館と博物館におけるアフリカの同時代美術の展示などの実態についての比較調査、研究は今後さらに深めていく余地がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①川口幸也「場の政治学―アフリカの同時代美術はどこに展示されてきたか」『Mouseion』、no.58、pp.1‐18、2012、査読なし。

②Yukiya Kawaguchi(et al) “Contemporary African Art and the Museum: A Roundtable,” *Nka: Journal of Contemporary African Art,* no.31, pp.46-111, 2012,査読なし。

③川口幸也「珍奇人形から原始美術へ―非西洋の造形に映った戦後日本の自己像」『国立民族学博物館研究報告』36-1, pp.1-34、2011、査読あり。

④Yukiya Kawaguchi, “A Fateful Journey: A Curator’s Perspective”, *Nka: Journal of Contemporary African Art*, no.28, pp.106-112, 2011,査読なし。

⑤川口幸也「語り始めたアフリカ―アフリカ美術の新たな動き」（「アフリカの美―ピカソ、モディアリアーニたちを魅了した造形」展図録（MOA 美術館））、pp.151-153、2009、査読なし。

〔図書〕（計６件）

① 川口幸也(著)『同時代のアフリカ美術―複数の「かたり」の共存は可能か』(明石書店　2011 年）　362 頁。

② 川口幸也(訳)、キャロル・ダンカン著『美術館という幻想―儀礼と権力』(水声社 2011 年）　315 頁。

③ 川口幸也ほか（編)『彫刻家エル・アナツイのアフリカ』
(展覧会図録　読売新聞社、美術館連絡協議会　2010 年）　pp.18-31。

④ 川口幸也、小川了と共編『セネガルとカーボベルデを知るための 60 章』(明石書店　2010 年）pp.174-178。

⑤ 川口幸也(編)『展示の政治学』(水声社 2009 年）391 頁。

⑥ 川口幸也、木下直之ほかと共編『芸術の生まれる場』(東信堂　2009 年）pp.36-47、58-69。

〔その他〕

① 川口幸也ほか　展覧会「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」(国立民族学博物館 2010 年 9 月 16 日―12 月 7 日、神奈川県立近代美術館 葉山　2011 年 2 月 5 月―3 月 27 日、鶴岡アートフォーラム 2011 年

4 月 23 日―5 月 22 日、埼玉県立近代美術館 2011 年 7 月 2 日―8 月 28 日）

６．研究組織

(1)研究代表者

川口　幸也（KAWAGUCHI YUKIYA）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：30370141